

98年、県立大フォーラムで講演

環境学ぶ学部「必要で重要」



熊本県立大学で開かれた「環境共生フォーラム」。中央が基調講演した真鍋淑郎氏
＝1998年12月、熊本市中央区



横山祐典・東京
大大気海洋研究
所教授

ノーベル物理学賞に決まった真鍋淑郎・米プリンストン大上席研究員(90)は海洋研究開発機構(当時は海洋科学技術センター)に在籍していた1998年12月、熊本県立大の環境共生学部新設に伴うフォーラムに招かれて基調講演している。「環境を学ぶ学部はこれから必要で重要だ」と、関係者を何度も激励したという。

真鍋さんの講演テーマは「地

球温暖化は起るのか」。依頼した堤裕昭副学長(65)＝海洋生態学＝は「国内で環境を学べる学部が珍しかった時代。真鍋先生は開設を非常に喜んでくれ、エールをもらった。気さくで、目を輝かせて話す姿勢が印象に残っている」と振り返る。

高校生ら約340人が参加。

真鍋さんに憧れていたこともあり、堤副学長は「会えた喜びで講演の細かい内容は覚えていな

い」と苦笑するが、「若者にとって、トップサイエンティストの話は大きな刺激になったと思う」。講演後の懇親会では、米全国各地での講演で化石燃料の使用に警鐘を鳴らしていると語ったという。

熊本市出身の東京大大気海洋研究所の横山祐典教授(51)は20年前、海洋研究開発機構で気候モデリングチームを指揮していた真鍋さんから部屋に呼ばれ、3時間ほど議論を交わしたという。「気候モデル研究ではスーパースターみたいな存在だが、話が盛り上がると時間を忘れて議論をするフレンドリーな人。

若手だった私を励ます感じで熱く議論させてもらった」

横山さんの研究は、気候モデルを基に実際の現象を定量的に実証する分野で、「真鍋さんの研究と車の両輪のような関係にある」という。「気候変動という研究の大枠では同じだが、アプローチが異なる。真鍋さんとの議論で、同じ気候現象でも別の見方があることを教わり刺激を受けた」

真鍋さんが第1次評価報告書を執筆し、2007年にノーベル平和賞を受賞した「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)にも関わっていた横山さん。「応用サイエンスの地球科学分野での物理学賞は初めて。この分野の重要性が認識された意義は大きい」と喜ぶ。「熊本では毎年のように豪雨や洪水が起き、県民は気候変動を肌身に感じていると思う。この分野に関する研究をしっかりやった方がいいという流れにつながればうれしい」と語った。

(清島理紗、浪床敬子)